續 家潮物

田中澄 宮

青春出版

続うず潮抄

愛と命ある限り

田中澄江

続うず潮抄——愛と命ある限り——

昭和四十年四月十五日　第一刷　　定価三五〇円

著者　田中澄江
東京都中野区野方町二ノ一六〇一

発行者　小沢和一

発行所　株式会社　青春出版社
東京都新宿区矢来町35番地
振替番号東京九八六〇二番
TEL（260）〇四二七（268）六七八〇

◇この本をお読みになったご意見ご感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。

製版印刷／弘済印刷　製本／石毛製本

目次

第一章　人の世のはかなさ醜くさ……5
お母さん、辛いことにはなれています。踏まれても踏まれてもフミ子は平気です。ねえ、お母さん……
第二章　大杉光平との別れ……53
しっとであったか絶望であったか、とにかくこの眼でその女をたしかめたかった……
第三章　ふたたび東京へ行こう……101
日も暮れたふるさとの海辺をさまよいながら、フミ子の瞳は光平をしのんで涙でぬれた……
第四章　放浪の人生にさようなら……140
思いは渦をなしてフミ子の胸の中を流れた。いまはもう二つに一つの道をえらぶしかなかった……
第五章　成功への階段……187
いつまでも一緒に住んで下さい。お父さんお母さんを養うくらいはフミ子も働けるようになりました……
第六章　運命のいたずら……229

夫が出て行くと、フミ子は窓ぎわへよって、庭を眺めた。大杉光平を見たのはその時であった……

第七章　突然の死 ……273

不意に砂地によろめいた。悲しみにひきさかれた声がフミ子の耳には夏蟬の声のように聞えた……

本文カット・三橋ヒロシ

写真提供

NHK大阪芸能部

鹿児島・熊本県観光課

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一章
人の世のはかなさ醜くさ

暮れそめし　海原の上を
輪廻流転の船はゆくなり
潮けむりたちこめて
泡沫のむこうに
今日もまた
小さな船はゆくなり

1

四月のなかば、葉桜のころであった。フミ子は尾道の町をあとに、一人東京へ行くことになった。

東京には、都井芳江も行っている。大杉質店の息子、光平も行っている。そのひとたちはそれぞれきまった学校で、きまった教育を受けるために行った。だが、フミ子のは、これといった仕事のあてのない上京であった。

せっかく「白い小鳥」の童話が入選して、その賞金の二十円が入っても、そのほとんどを、ながい間の夢がかなえられて、岡山にやっと一軒の店をかまえたのもつかの間、その店が焼けて、一切の家財道具を失ってしまった父母に与えなければならなかった。

父母は、火事の五日目に、また尾道へもどって来た。がらんとした部屋で、途方にくれている両親の打ちしおれた姿を見るにつけ、彼女は、しゃにむに

東京へ出て働かなければならない、と思い決した。父母の絶望を救うには、これ以外に道はない、と思ったからである。

東京の土をふんだ彼女は、東京が空想していた以上ににぎやかな大都会であるのに目をみはり、駅前を走っている電車におどろいた。バスケットを下げ、柄のながいコウモリがさを片手にした彼女は、その足で、都井芳江におそわった道順をたよりに、訪ね、訪ね、何度か電車をのりかえ、やっと雑司ヶ谷というところへたどりついた。

護国寺という大きなお寺の前を通り、やっとさがしあてたその家の門には『生田流箏曲教授所』の看板のそばに『都井春路』という達筆な表札がかかっていた。

「まあ、フミちゃん。電報でもくれればむかえに行ったのに」

都井芳江はひどくよろこんでくれた。しかし、たった半日もたたぬ間に、都会風に気どった芳江のおばさん、春路に、いなか丸出しの行儀をとがめられて、息のつまる思いになった。

箸の上げ下げにも気をつかわなければならないこの家を出たくなった。

そのあくる日、彼女は午前中を履歴書書きにすごし、午後、お茶の水へ出かけた。駅前で、芳江と待ち合わせ、神田の古本屋街を見てまわる筈であった。

神田や本郷の学生街を控えたこの駅は、ひっきりなしに学生が通る。金ぼたんの学生服を見れば、思いに浮かぶのは、本郷へ通う大杉光平であった。

万一と思い、もしもと願ったそのひとは、芳江との約束の時間が十分すぎたころ、まさしくそこにあらわれた。

学校の帰りであろう。ブック・バンドをかけた数冊の本をかかえて、お茶の水橋をわたって駅に向かってくる。

「大杉さん、光平さん！」彼女は瞬間息をのみ、と

びつくような勢いで、ひとめもかまわず走りよって声をかけた。
光平もびっくりして立ちどまると、
「いつ出てきたんです？」と眼をかがやかせていった。
「昨日……うちもおどろいた」とフミ子はなつかしさをこめて見上げた。
「いま、どこに？」と光平はフミ子をじっと見まもる瞳でいった。
「都井さんのおばさんのうちです」
「ああそう、それでいまは？　どしてあそこに？」
「都井さんを待っとったとです。うちが神田の古本屋街を見たいいうたら案内するいうて」
「僕が案内しようか」
「うあっ」とフミ子はとびあがった。
ふり向いて二人を見ている通行人の目に肩をすくめて、
「すいません」とわびたが生き生きとはしゃいだ声を抑えようもなかった。
「尾道の海っぱたの道とまちがえてしもうて、大杉さん恥ずかしかとでしょう？」
光平は、
「別に……」と首をふって、
「それで？　これから何を？　上の学校を？」
「いいえ、まだそれどころじゃなかとです。そうそう、うち、あんまり思いがけなく大杉さんにおうたので、一番先にいおう思うたこと忘れていた。あの、あんたに見てもろうた童話が当選して二十円もろうた！」
「おめでとう」
今度は光平がはしゃいだ声をあげた。
「でもね、岡山の店が焼けてしもうてみんな親にやってしもうた。すいません、大杉さんに何もお礼がでけへん」
「いや、僕なんか何一つかまわないが、それは気の毒なことをしたなあ、岡山の店はあんなにたのしみ

にしてたのに」
「それでうち、明日からでも何か仕事見つけて働かなならんのです」
その時、
「フミちゃん、フミ子さん」
駅の改札口を足早に出ながら、都井芳江が声をあげて走りよって来た。
「改札口におらへんし、びっくりしたわ。どこに行ったんか思って」
「大杉さんにおおたから、つい、立ち話しとったの」
「そうやって話してるとまるで尾道の雰囲気だな」と光平が笑った。
「大杉さんはどこに住んどられるんですか？」と、都井芳江は女子大生らしく、いんぎんに会釈(えしゃく)した。
「本郷です。学校に近いところ。今日は神田の本屋へ行こうと思って」
「本郷いうたらどっちかいな」と、フミ子がひょうきんな声を出した。
「本郷いうたらね」と芳江は東の方を見やって、
「こっちやったかいな」とこれもまだ上京したてで自信なかった。
「いや北の方だ」と光平がいった。
「この橋をわたって右へ行ってあそこに病院があるでしょう。あの横を通って右に行くと本郷三丁目、それから先が僕たちの学校だ」
「ねえ、道に立ってばかりおらんと、どこかでお茶でも飲まん？」と芳江は、すれちがう通行人の視線にへきえきしたようであった。
「ああ、きみたちはまだ神田名物のそば屋を知らんだろう。そこへつれていこう」
「フミちゃんはうどんがいいんではないの？」
「何でもええ、うどんでも、そばでも、東京のものなら何でもうちは食べてみたい」
光平と芳江は声をあげて笑い出した。
『やっぱり東京へ来てよかった。東京へ来たからこ

そ、こんなにたのしく、誰の眼をおそれることもなく、そば屋にもうどん屋にも、しかも大杉さんにつれて行ってもらうことができるのだ』とフミ子は先に立って歩き出した光平の、たのもしい肩のあたりを見つめて、心をはずませていた。

次の日、フミ子は学校帰りの芳江と、またお茶の水駅で待ちあわせ、帝大赤門の前を通って、森川町の奥の『太平館』という学生相手の下宿屋を訪ねた。

フミ子はどうしても大杉光平に会って、仕事をさがしてもらいたかった。

しかし高歌放吟しながら、その門から出て来た学生たちを見た時、フミ子は、急におじけついてしまった。男ばかりいるとは、前の日に光平から聞いていた。女が入っていってもいいものだろうか。

ひとが行きつもどりつしている。玄関のガラス戸があいて、

「あの……うちにお見えなんですか」

女あるじらしいひとに声をかけられた。

「え、大杉光平さんに……」と芳江がこたえた。

光平は、ついいましがた学校から帰ったばかりとのことで、女あるじの声にこたえて、学生服のままで大杉が玄関にあらわれた。

「やあ、来ましたね」くったくのない笑顔に誘われて、フミ子と芳江はその家にあがり、長い廊下を通って、彼の部屋へ案内された。

机や本箱や洋服掛けや、変哲もない学生の部屋であったが、東京というところは、男のひとの下宿に女が訪ねて行っても、別に大げさこさわぐひともないようだ。そのことがうれしかった。

挨拶もそこそこに、三人はなつかしい尾道弁で、東京の印象や食べものの話など、たわいない雑談をつづけたが、女あるじのおばさんがお菓子鉢を持って来てくれて去ったあとで、フミ子は、やや口調をあらためていった。

「ね、うちは、大杉さんに明日もし都合よかったら、大日本新聞社に行ってもらいたいんです」
「大日本新聞？」
「ええ、女学校の横山先生から紹介の名刺をもろうて来てます。封筒の上書きを書く仕事でもいいけれど、いってたのんでみよう思うて」
「大日本新聞って、一月くらい前に廃刊になったんじゃないかな、やまと新聞と合併になったらしい」
「ほんと？」
気落ちしたフミ子を気の毒そうに見る光平の眼がやさしかった。
「白い小鳥社へも、一緒に行ってもらうんやろ」と芳江がはげますようにいった。
「ああ、童話のね、そこに事務の口でもあればいいけど、ま、お茶でも飲んで考えて下さい」
光平は器用な手つきで、急須にお茶を入れた。
『あの心配性の尾道の母親たちが、この光景を知ったら……』
光平との交際はただ口をきくというだけでも尾道では御法度であった。両方の母の顔が胸をかすめた。

2

光平はそのあくる日の午後『白い小鳥社』を一緒に訪ねてくれた。お茶の水に近い社屋は、意外と小さい建物で、来意をつげ、応接間で待っていると、長髪に太い縁のめがねをかけ、和服にはかまをつけた、いかにも文士らしい風貌をした中年のひとがあらわれた。
「林フミ子さんですね」とたしかめるように見すえて、
「わたしが社長の三上青風です。はじめまして……」と重々しく挨拶した。
その応接ぶりには、フミ子を一人前の作家として、丁重にあつかっている気持があらわれて、フミ子をとまどいさせたが、就職のことを切り出すと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

「林フミ子さんが？」と三上は、まったく意外だという表情を見せた。
「はい、うちを……わたしを……ここにお茶くみでも封筒書きでもいいんですが、『白い小鳥社』につとめさせてくれんでしょうか」
「そいつは無理でしょう。林フミ子さんをうちの事務員に……そいつは全然無理ですよ」と三上は、頭から問題にしないようであった。
たとえ卵であっても、作家にお茶くみはさせられないということらしかった。
自分の童話のでている「白い小鳥」をもらって、外へ出たが、光平がかたわらにいなかったら、涙をこぼすところだったと思った。上京第一歩のつまづきが痛かった。
「なんとかなるよ、心配しなくとも」光平はやさしくはげまし、程近い大学の構内を案内してくれた。
古い大名屋敷の大きな門構えの中には、各学部の建物が点在し、これが日本の最高学府かと、眼を見張る思いであった。銀杏並木の下を通り、三四郎池のほとりにたたずんでフミ子はいった。
「今度、また下宿に行ってもいいですか、就職の相談に」
改めてこんなにどっしりしたところに学ぶ光平がたのもしく見えた。
「そうだな、はがきを出すよ、来てもらっていい日を……」
光平は気軽にいい捨てて、二人のかたわらを行く中年の紳士に会釈し、あれは自分も講義を受けている中平助教授だと教えてくれた。

フミ子が東京へ来てから、もう五日もたってしまった。フミ子は都井芳江が、毎日学校へ行ったあとは墓地を歩いたり、一人で上野公園というところへ行ってみたりして、外見にはのんびりしていたが、心はあせって不安だった。いつまでもこの家にいて、宿泊代も食費もただというのに甘えてはいられ

ない。

上野へ行ったのも、駅前にある口入れ屋を訪ねようと思ったのだったが、入る勇気がなかった。そして図書館と博物館を外から見て帰った。

家の近くの墓地に白い花が咲いていた。尾道のお寺の庭でもよく見た花である。

何かなつかしく、芳江の机の上に活けて尾道をしのんでいると、内弟子のちよ子が二通の郵便をとどけてくれた。一通は大杉光平からのはがき、一通は尾道の母からであった。

「あのう……」とちよ子がいいにくそうにいった。

「おひまでしたら、おっ師匠さんがちょっとお話したいことがおありだそうです……」

「はい」

一人残った部屋にフミ子は母の手紙をひらいた。母の手紙には、フミ子が東京へ出かけてから、何となく心細く、火事の跡始末の疲れが出て寝こんだと書かれてあった。つたない文字が、母の面影とかさなって、フミ子の胸にせまってきた。

『コンナシンパイゴトハ知ラセタクナイガゲンキデピンピンシテイルトイエバウソニナル　東京ニオモワシイ仕事ガナケレバカエッテキテツカアサイ　オヤ子三人グライノクラシハ何トデモナルケン……』

母が病気と聞けば、とんで帰りたいが、一方にもしも大した病気でないならば、石にかじりついても、このまま帰りたくないという思いがあった。

光平からのはがきは、簡単な用件だけが几帳面な字で書かれていた。

『あなたの希望にそえるかどうかわかりませんが、仕事のことで相談したいので、下宿までおいで下さい。もう都井君が一緒でなくても大丈夫でしょう』

どんな仕事であろうか。どんな仕事であっても、この家をぬけ出ることができれば、とフミ子は思った。

もう一度内弟子によばれて都井のおばさんのところに行くと、いきなり頭からきつい調子でお叱言が

降ってきた。
「わたくしも年頃の娘さんをあずかっていると心配なものですからね……ちょっと御注意したいことがありますの……」
「は？」きたなとフミ子は身を固くした。
「よけいなお世話かもしれませんけど、若い娘さんがいたずらに都会にあこがれて出てくるのって感心しませんのよ。東京は広く大きいけれど一方にまた、誘惑の都ですものね……ふわふわとやって来て、転落するひとは数知れずありますのよ……」
フミ子は持ち前のきかん気で、
「うちは親が貧乏で金ばかせがなりません……いなかにいるより東京の方がずっと金になると思いますけん……」
「さあ……こわいのはそのことですわ……お金はたしかに大切なものですけれど、これほど人間を毒するものはありません……え……端的に卒直に申上げましょう。男女交際の失敗から、身をもちくずすひとがたくさんおりますの……ひとさまの私信を勝手に拝見したようで悪いけれど、はがきですから半ば公開されているものですわねえ……ちょっと見たらあなた……男のひとの下宿に行くんですって……しかもうちの芳江も御一緒だったようですね……びっくりしました。心臓が止まるほどおどろきました」
フミ子は光平とは何でもないつきあいだといったが、
「あなたは何でもなくても世間はどんな誤解をするかもしれません」とおばさんはフミ子を針のように鋭い視線でとらえ、
「気をつけて下さいな。まして、芳江は学生ではありましても一応仮祝言した夫がありますのでね。たとえあなたが何でもないひととしてつきあっているひとでも芳江までつれまわるのはやめて下さい……それだけは絶対にやめて下さい……約束していただけます？」
フミ子はうつむいたまま『もうここには、これ以

上やっかいにはなれない」ことをさとった。
学校から帰って来た芳江にはさり気なく、ただ外出することを告げると光平のはがきを胸に大事にしまって出た。
雑司ヶ谷から本郷までの道はやさしかった。護国寺前から電車にのって大塚仲町でのりかえれば、本郷三丁目まで一本道であった。
電車の中でフミ子は、あとからあとからわいてくる涙をひとに見せまいとして一生懸命こらえていた。そんなにふしだらな娘に見えたのだろうか。都井芳江のおばさんから手きびしく注意されたことがこたえていた。尾道の大杉光平のお母さんに叱られた日のことがあざやかに浮かんだりした。
太平館では、光平はまだ帰っていなかったが、女あるじがわざわざ光平の部屋へ案内してくれ、
「大杉さんはもう二年もいてこの家で一番の堅物なんですよ」
こちらから何もいわないのに光平をほめ、彼女にもこだわりのない挨拶だった。幾つぐらいであろうか、小太りのあかるいひとで、歯ぎれのいい物言いがとげだったフミ子の心をなぐさめてくれた。
光平は間もなく帰って来て、
「一人で来られてよかったね」とうれしそうだった。
「まあ、コーヒーでも入れよう……お湯もらって来る」
「コーヒーはあとでええですけん」とフミ子はすぐ切り出した。
「聞かして下さい。どんな仕事ですか？」
「それがね……あんまり君のよろこびそうなことじゃないんだが……」
「どんなことでもします。あの家さえ出られるなら……住み込みですか？」
「ああ、住み込みで」
「そう、そんならなおうれしい」
光平はこの間三四郎池のそばで会った、中平助教

授の奥さんが、からだが弱く、この間お産して、女中に帰られて困っているのだといった。
「もし君が一時しのぎに来てくれたらありがたいっていうんだが……女学校まで出て、あんなに物を書く才能があるのにと思って僕はことわったんだが、先生は女中としてではなく、秘書として来てもらってもいいっていうんだ」
フミ子はもう覚悟をきめていた。
「どっちでもええです。うちにはどっちでもできると思います……大杉さん……お世話してつかあさい」といった。
「でもあまり自由時間はないと思うし……」
「いいえ、うちは一生懸命働きます。うちはふしだらな娘ではないという証拠を見せるためにもがんばります……」
「君がふしだらな娘だって？　誰がそんな……」
「ごめんごめん、ちょっとヒステリおこしちゃったな」といいながらフミ子は涙をおさえたが、その指先からこぼれて涙はとめどなかった。
「どうしよう……東京へ来てずっと気がはりつめてたのに……ここへ来たら急に気が弱くなってしもうた……うち恥ずかしいわ……大杉さんに涙見せてしもうた」
大杉光平の部屋は彼女にとって、ここだけが自分を心から休ませてくれるありがたい所に思えた。

そのあくる日、フミ子はバスケット一つぶらさげて、光平につれられて大学の助教授である中平家にやって来た。
派手なお召しの絣を着て、まだお嬢さんお嬢さんした奥さんは、中平助教授の先生の令嬢だということであった。
フミ子が県立高女の出身だと聞くと、
「何だかうちで子守りなんかおねがいするの勿体ないみたいですけれど……」
「大丈夫です」フミ子はとっさにこたえた。奥さん

は笑って、
「ま……おもしろいかた……大丈夫ですって、どういう意味？」
「女学校に行っている時も月謝がない時は工場で働いたことがありますけん……」
「そう……それでは苦学なさったの？」
「はい……べつに、苦学とは思うとらんだったけれど……」
そばから光平が口を添えてくれた。
「林さんはご両親がうちの父や母と懇意なんです。大変働き者のご両親ですから林さんもいつも陽気で……何の苦労でもなく、よく家の手伝いをしていました」
フミ子はてれて笑った。
「ありがとう……いろいろ加勢してくれて……でも、掃除などあんまり得意ではない……だらしのうて……いつも母におこられてばかり……それに大飯食いで朝寝坊で……」
光平ははらはらと心配そうであったが、奥さんはおもしろい方とひどく気にいったようであった。
とにかく子守りと家事手伝いということに話がきまった。帰る光平を送って一緒に門を出ると、
「君に一つ忠告しておくけれどね……」と改まった口調で、
「東京ってところは、言葉づかいがやかましいから早く東京言葉を覚えなさいよ……」
「そう……うちも気にしているのやけど……どしたら早う覚えられるかしら……」
「ま……活動写真や芝居を見たり、寄席に行ったりってのがいいと思うけど……気をつければ早く身につくよ……」
「うん……」
「そのうんってのがいけないんだ。うんなんて、おとなのくせにいうと笑われるよ……はい、とか、はあとかいったほうがいい」
手をふって帰って行く大杉のあとを見送って、フ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook